

展望

## 動物に会いたくって

柴田佳美

年末年始はなんとも忙しい。そんな時ふと、

犬の潑刺とした表情や猫のしなやかな姿に会いたくなる。今回は動物に向かう歌を見たい。

白き犬水に飛び入るうつくしさ鳥鳴く鳥

鳴く春の川瀬に 北原白秋『桐の花』

白い犬が春の川に飛び込む。犬の生き生き

した表情と素早い動きが想像できる。「鳥鳴

く鳥鳴く」の繰り返しによって、歌の焦点が

聴覚に移る。また景の中で、人と犬、鳥、川

がかかり合っている。そのような大きな視

点を感じる。

北原白秋は「桐の花とカステラ」の中で次のように記す。「私には鳴いている小鳥のし

らべよりもその小鳥をそそのかして鳴かすめ

るまでにいたる周囲のなんとなき空気の捉へ

がたい色やにほひがなつかしいのだ」。歌と

共に読むと、いっそう味わいが深まる。

そりやそうさ口が命の部首だから食べて

ゆく他ないんだ今日も 久永草太

最近読んだ歌集『命の部首』の一首。つい

先ほどまで生き物のかかり合いに感動して

いた私も、命を保つために他の命をいただい

ている。

『命の部首』は、大学の獣医学科で学び、卒業をした後は動物病院で働く久永草太の歌集である。

治す牛は北に、解剖する牛は南に繋がれ

ている中庭

採算と命の値段のくらき溝 鶏の治療は

ついぞ習わず

死が暗く怖い僕らの質量は超新星になる

には足りず

ボサボサの猫を一回見たからに名のつく

「ボサボサの猫の道」

一首目は、学問のために中庭に繋がれている牛の歌。牛は人間の都合で北と南に分けられて

いる。二首目は、鶏を治療するとその経済的価値に見合

わなくなってしまうということだろう。結句の「ついぞ習

わず」により、さみしさが一層深まる。三首目と四首目の、

日常の暮らしの手触りが伝わる歌もいい。

動物と接する機会が多い作者は、人間と動物との間に

悲しみの影がさすような状況に向き合うことも少なくない。現実を認識したう

えて、命や生きることへの真摯な思いを持ち続けていることが、歌から伝わってくる。

次に、小島ゆかり著『サイレントニャー

猫たちの歌物語』を見たい。短歌七十九首と

エッセイ二十五篇からなる。

街に出て、猫に会いたくても意外に会えない。さつと通り過ぎて行ってしまう。それが、

この本を開けば必ず猫の「たますけ」たちの、

豊かな姿に会えるのだからうれい。

隠れてはまた現れて猫のゆく道はこの世

の抜け小路なる

うさんくさき自分に気づくいついかなる

ときも真顔の猫と暮らせば

鳴きしきる蟬を銜えて猫走る猛暑の昼の

燃ゆる陽のなか

身ひとつで生老病死とたたかうを選ぶだ

ろうきつと猫族さみは

古猫の髯はしみみに若猫の髯はさららに

月に照らさる

小島ゆかりが直感的に愛した命の感覚、命

のなまの手触りが濃く描かれる。そんな印象

を受けた。命や生といったものの全体を見る

ことは難しいが、猫の「たますけ」たちの場

面場面から猫全体が、ひいては命や生のご全貌

といった大いなるものに足を踏み入れている

作者の姿がある。